

[成果情報名]夏秋どりイチゴ「かいサマー」の安定生産技術

[要約]夏秋どりイチゴ「かいサマー」は、簡易高設装置を用い、最初の花房は取り除き、摘花は1花房当たり4花程度残して行うと上物収量が向上する。

[担当]総農セ・高冷地分場・野菜作物科・平林正光

[分類]技術・普及

-----  
[課題の要請元]

果樹食品流通課、中北農務事務所、富士・東部農務事務所

[背景・ねらい]

本県では夏秋どりイチゴ「エラン」に代わる品種として果実形状や食味が良好な「かいサマー」を県オリジナル品種として育成したが、品種特性に応じた最も安定的な生産技術が確認されていない。このため、「かいサマー」の夏秋どり栽培における安定生産技術について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 夏秋どりイチゴ「かいサマー」を安定生産のための栽培方法は次のとおりである。
  - (1) 高冷地分場で考案した簡易高設栽培は、「かいサマー」の夏秋どり栽培に適した方法である。土耕栽培に比べ、上物収量が3割程度増収する(表1)。
  - (2) 花房管理は、最初に出蕾する花房のみ摘除し、その後に出蕾する花房は放任とする。また、摘花は1花房当たり4花程度残して行う。慣行の方法に比べ上物収量が2割程度増加する(表2)。
  - (3) 定植期は5月上～中旬、栽植密度は30cm×30cmの2条千鳥植えとし、灌水はpF1.9で行う。施肥は液肥で週2回行い、合計窒素成分で15kg/10a程度とする。わき芽は摘除せず放任とする。

[成果の活用上の留意点]

1. 本栽培方法は、標高700m以上の夏季冷涼な地域を対象としている。
2. 苗の供給は平成21年度から開始される予定である。

[期待される効果]

1. 「かいサマー」の安定生産技術が普及することにより、富士北麓、八ヶ岳南麓を中心とした高冷地に地域特性を活した夏秋どりのオリジナルイチゴ産地が形成され、新たな品目を基幹に位置付けた収益性の高い特色のある地域農業の振興が図られる。

[ 具体的データ ]

表1 高設栽培が上物収穫量に及ぼす影響 (2006年)

	上物収穫量(g/株)					重量 上物率(%)	上物 1果重(g)
	7月	8月	9月	10月	合計		
高設栽培	56.0	69.4	23.1	18.9	167.4	43.3	9.8
土耕栽培	52.7	47.5	8.8	15.9	124.9	42.2	9.1

注) 耕種概要

定植: 5月17日、収穫期間: 7月3日 ~ 10月31日、栽植密度30cm × 30cm・2条植え・6200本/10a

高設培養土: そだち(野菜用育苗培養土)、灌水点: pF1.9

施肥: [高設] 全量液肥を追肥で2回/週行い、窒素成分量は15kg/10a

[土耕] 基肥の窒素成分は12kg/10a、追肥は液肥で2回/週行い、窒素成分量は9kg/10a

苗: 前年秋に採苗し、7.5cmポットへ定植

上物: 7g以上の正形果

株管理: わき芽は摘除せず放任とし、老化葉や発生したランナーはすべて摘除

表2 花房管理方法が上物収穫量に及ぼす影響 (2007年)

花房管理方法	上物収穫量(g/株)					重量 上物率(%)	上物 1果重(g)
	L級	M級	S級	2S級	合計		
花房摘除・強摘花	23.3	63.3	27.1	32.2	146.0	58.8	9.7
花房摘除・弱摘花	24.4	66.6	37.2	32.4	160.6	60.0	9.7
<b>花房放任・強摘花</b>	<b>28.2</b>	<b>85.8</b>	<b>39.6</b>	<b>30.4</b>	<b>184.1</b>	<b>56.7</b>	<b>9.8</b>
花房放任・弱摘花(慣行)	27.9	72.9	24.4	35.3	160.5	51.5	9.8

注) 耕種概要

雨除け高設栽培、定植: 5月7日、収穫期間: 7月6日 ~ 10月31日

上物: 7g以上の正形果、規格別の1果当たりの重さは、L級13.0g以上、M級9.0-12.9g、S級8.0-8.9g、2S級7.0-7.9g

花房管理方法: 花房摘除は1株当たり5花房に制限し、花房放任は果房数の制限を行わない。強摘花は1花房当たり4花、弱摘花は6花程度残すように行った。また、いずれの処理区でも最初に出蕾する花房は必ず摘除した。

[ その他 ]

研究課題名: 夏秋どりイチゴの新品種の育成と良品・安定生産

予算区分: 県単(重点化)

研究期間: 2006 ~ 2007年度